説教20220102マタイ2：13-23「こわがらないで、ヘロデのことを」

キリストよお越しください。弟子たちの中に立ち、復活の御姿を現されたように、私たちの内にもお臨み下さい。

私たちは新たな年を与えられましたことをイエス様に感謝しながら今日の新年礼拝を捧げてまいりたいと思います。

家族、というのは、（もちろん私たちはイエス様を中心とした神の家族でありますが、）この地上で形をとっている、血縁を中心とした家族というのもあって、それも又大事な場所であります。私も、この年末に両親や妹たちが住む京都の家で、その家族と再会してキリストを熱く語って参りました。それで思いますことは、家族というところには、それぞれの物語があって、家族になった人たちはその物語を共有しながら集まって人生を送っているということです。各家族にはそれぞれの様々な物語があることでしょう。神の家族には神の家族の物語があり、地上で営まれる各家族には各ご家庭それぞれの物語があるということです。但し、昨今は、その物語る力が弱くなって、人々が家族を形造らないようになってきたという悲しい現実があるように思います。

先日カトリックの神父さんとお話する機会があって、多くのことを教えられました。私が彼に、「なぜ近頃は教会に若い人が集まらないんだと思われますか？」と質問したところ、彼は、「それは、今の社会で、若い人が家族での生活に魅力を感じなくなり、家族を造らなくなったからですよ」と答えられました。私はこの答えをちょっと外れた答えだなと思いました。なぜなら私の頭にあった回答は「それは、若い人が教会に魅力を感じなくなり関心がなくなったからです」といったたぐいの回答だったからです。しかし後でよく考えてみますと、この神父さんの回答は、家族としての教会についての深い理解に根差すものであることに気付かされました。教会というのは本来、個人で参加するような場ではなく、キリストにつながる集いの場であります。だから、現代社会に、集いの場である家族が希薄になってくると、同じように神の家族の集いの場である教会も希薄になるという捉え方なのです。

さて今日の聖書箇所は、マリア、ヨセフ、幼子イエス様という、家族の原型が物語られている箇所であります。この家族は、現代における家族の物語にもなりうる非常に現実的な愛の物語であります。こういった形の家族の物語が語られているのは、聖書中でこの箇所とその前後、そしてルカによる福音書の並行する箇所だけであり、非常に短いのですが、それでもこの家族物語は、動きに満ちて、時としてはらはらさせられるような話に満ちています。例えば、この１３節からの、家族のエジプトへの逃避行は、ヨーロッパ中世以来、多くの画家によって描かれています。荒れ野の中の茂みのようなところに幼子イエスを抱くマリアが描かれ、少し離れてヨセフが周りを警戒しているといった絵です。イエスとマリアは慈愛に満ちて微笑み合っているという姿ですが、ヨセフの方は微笑む余裕はなくて、渋い顔をしているといった姿で描かれています。こういった３人家族の有様は、まことに現実的で、今の世の中でも、こんな心持で過ごされているご家族も多くおられることでしょう。

私たちは聖書に出てくるこの家族物語の箇所を、現実離れした絵空事の物語ではなく、現実的な物語として読むことが出来ます。例えば、１６節で、ヘロデ王がベツレヘムとその周辺一帯にいた二歳以下の男の子を、一人残らず殺させた、という出来事は、空想の出来事なのではなく、ベツレヘムを統治するヘロデ王が、ベツレヘムでイエス様が生まれた時を厳密に調べ上げて、該当する幼子、2-30人をリストアップして配下の者たちに殺させたという、実際の出来事なのです。このように見ていきますと、私たちは統治者ヘロデ王の実像に迫れるようになり、ヘロデを身近に感じて、或いはヘロデの恐ろしさにおののくことになるかもしれません。ヘロデは実に恐ろしい人でした。「殺意に満ちた老人」ともよばれていたそうです。彼は、町の幼子たちもこのように平気で殺してしまいましたし、自分の子でさえも都合が悪くなり不必要になれば、平気で殺してしまいました。ここに私たちは、マリア、ヨセフ、イエス様という聖なる家族に対置された、壊れた家族の在り方を見せられます。ヘロデが形作った家族は壊れていました。しかし彼はユダヤを統治する王となっていました。それは内乱が続いていたユダヤ地方を彼が平定し、一定の秩序と平和をもたらした人物としてローマが認めて、彼を王に任命したからでした。私たちはここで、この「ヘロデによる平和」と、いわゆる「主の平和」の根本的な違いに思いを致さないではいられないでしょう。この新たな一年も、私たちは主の平和の方に満たされ、悪しき偽りの平和から逃れられるようにと祈って参りましょう。

さて聖書の中でヨセフは影が薄いです。マリアはイエス様に十字架まで付き従い、最後までイエス様と親しく会話しましたが、ヨセフは、イエス様が洗礼を受けるころには亡くなっていたらしい、ということくらいしか分かっていません。聖書は確かにヨセフにそんなに光を当ててはいないのです。でも、今日の聖書箇所で、読者が、ヨセフに注目して光を当ててみますと、彼の素晴らしい働きに感銘を受けることは間違いないことでしょう。何せ、神の独り子イエス様の命を守るために、母と子とを連れまわし、そして、その作戦が見事に的中して、この家族たちの命は守られたわけですから。でも、この箇所の物語がそんな風に人間的な感動物語として語られることはまずないのです。それはなぜでしょうか。それは当の本人のヨセフ自体が、人間をほめたたえること、人間の手柄を誇示するということを知らない人であったからでしょう。彼は、ダビデの子孫でありましたが、そのことは彼にとって全く誇るべきことではありませんでしたし、彼のは一介の大工であり誇るようなことはありませんでした。そうして、ヨセフが今回のエジプトへの逃避行、そしてイスラエルへの帰還、そしてナザレの街に引きこもって家族を守ったという、この一連の出来事も、ヨセフにとっては全く彼が自分を誇るようなことではなかったのでした。ここら辺の自意識と言いますか心の在り方は、自己実現などと言ってうろたえている現代人とは似ても似つかないことだと思います。

そして多くの人がヘロデの恐ろしさに魅入られて、結局ヘロデに支配されてしまったのと較べて、ヨセフはあっさりとヘロデを離れて、その悪しき支配から逃れられたということも、このヨセフの心の在り方によっているのでしょう。私たちはいつも主の祈りで「悪よりお救い下さい」と祈っていますが、具体的な行動においては、このヨセフの物語が参考になることでしょう。

さてヨセフたちが、このように悪しきヘロデから救い出されたことを物語っていくには、どうしても神の霊、聖霊が必要であります。今日の家族物語は、聖霊に満たされて導かれる、スピリチュアル・ストーリーです。ヨセフ達に、先ず最初にこの聖霊による家族物語が与えられた事の次第はマタイ1章19節からに記されています。お読みします。

「夫ヨセフは正しい人であったので、マリアのことを表ざたにするのを望まず、ひそかに縁を切ろうと決心した。このように考えていると、主の天使が夢に現れて言った。「ダビデの子ヨセフ、恐れず妻マリアを迎え入れなさい。マリアの胎の子は聖霊によって宿ったのである。」

ヨセフはこの天使の声に従ってマリアと結婚したのでした。ヨセフが最初マリアと縁を切ろうとしたのは、彼の人間的な優しさもあったかも知れませんが、には彼が当時の社会の秩序を破ることを恐れたからだと言えるでしょう。でもそんな事情にはるかに勝ることを天使は彼に告げ、そうして彼は、天使の言葉を信じてそれに従ったのでした。ここには私たちが平生祈っています「御心に従い」という祈りが具体的な行動として現れています。このとき以来、聖書にはヨセフが天使の声に聴き従う姿が描かれていきます。今日の聖書箇所で天使がヨセフに告げた言葉を挙げてみます。

「起きて、子供とその母親を連れて、エジプトに逃げ、わたしが告げるまで、そこにとどまっていなさい。ヘロデが、この子を探し出して殺そうとしている。」

「起きて、子供とその母親を連れ、イスラエルの地に行きなさい。この子の命をねらっていた者どもは、死んでしまった。」

いかがでしょうか、私たちが神の声を聴いてそれに従うには、タイミングというのがとても大事であるということが思い知らされるのではないでしょうか。そうしてそのタイミングというのは人間の側で計画した時なのではなくて、神の時、神によって知らされるタイミングなのであります。

さて神の時というのは、私たちの思いをはるかに超えて、思いがけない時に突然知らされるということもあるでしょう。又、それと同時に、神の声は、私たちの日常の生活の歩みのうちにも聞かされる、ささやかでか細いささやき声と言った感じの時もあるでしょう。ですから私たちは、どんな神の声でも聞き逃さないように、いつも耳を澄まして、神の声を聴きとれるようにして参りましょう。

そのように神に対して心を開き、耳をそばだてているヨセフの様子が今日の22節からに記されています。

「しかし、アルケラオが父ヘロデの跡を継いでユダヤを支配していると聞き、そこに行くことを恐れた。ところが、夢でお告げがあったので、ガリラヤ地方に引きこもり、ナザレという町に行って住んだ。」

ヨセフは世の人のうわさ話や伝聞にも耳をそばだてていました。だから彼は、今、ユダヤの地がアルケオラという悪い王のもとで悪い状況にあることを察知し、ユダヤの地に行くことを恐れためらうという心が与えられました。そこで又、天使の言葉が彼には聞こえてくるのです。それは「あなたたちはガリラヤ地方に行きなさい」というお告げであったでしょう。

この様に神は私たちの状況をつぶさに見ておられ、そうして私たちの叫び声やつぶやきに応じて、神の言葉を返して下さるときもあるのです。

私たちは、自分たちのいたたまれない状況や、恐れ悲しみ、そして罪や恥などを、主イエスに対して告白してもよいのです。そうすれば、主イエスは私たちに、行いの指針、生活の目的、解決の方法などを、具体的に、時に適って返して

下さいます。

私たちはヘロデといった悪しき人のことを恐れるあまり、かえってその人に執着しその人の支配から逃れられなくなることがよくあります。私たちはそうではなくて、絶えずイエス様に向かって祈り、イエス様と応答していくことによって、悪から救い出されていきたいと願います。

お祈りいたします

憐み深い私たちの父なる

あなたが私たちにこの新たな一年を与えて下さったことに感謝し、御名をほめたたえます。私たちはあなたが定めておられる時の定めの中を歩まされています。その時間の中で、あなたからのささやき声を私たちが耳を澄まして、心を清めて聞き、従っていくことが出来ますように。

今年も多くの国々からのニュースやお便りを耳にしますが、私たちがうわさ話や扇動に煽られることなく、あなたをよりどころとして、一歩一歩を守られ祝福されて、豊かな恵みを受け取っていくことが出来ますように。

今、この地上で営まれています、それぞれのご家庭の生活をあなたが祝し守ってください。また、イエス様を中心とする神の家族が、世界に広がる教会によって、ますます広がっていきますように。

昨年お会いできなかった兄弟姉妹のことを覚えて祈ります。私たちはたとえ会えないでいても、御子キリストによって一つとされ、同じ思いと同じ愛によって祈ることが出来ます。どうか私たちの祈る力を増し加えて下さい。そして最後の時に完成する永遠の時を待ち望みながら、日々の生活を丁寧に生きていくことが出来ますように、私たちを導いて下さい。

父と聖霊とともに